

『平治物語』諸本中における平治物語絵巻の位置

宮 次 男

平治物語絵巻を考察するとき、諸本ある『平治物語』の中において、絵巻がいかなる位置にあるか、また他本との関係はどうかという問題にふれる必要がある。これは、この絵巻の説話絵巻としての性格を明らかにするためには、当然通過しなければならない関門であり、また『平治物語』の成立を考える上からも、検討を要する課題である。

『平治物語』本文の研究は、いずれの本を古本と見るか、またその分類、系統をどのように整理するかという問題で、およそ二説に分けることができる。その一は、高橋貞一氏の『平家物語諸本の研究』の付録第二章「平治物語諸本の研究」（昭和一八年八月）および山岸徳平氏との共著 未刊国文資料『平治物語（九条家本）と研究』（昭和三五年四月）等で論ぜられるところで、『平治物語』の諸伝本を、物語の原形を保持していると認められる甲類本と、それらを基にして、改訂増補して流布本に至る過程を示す乙類本と、流布本の三つに大別し、最も古体を伝える甲類本として、金刀比羅宮蔵本の系統を想定する説である。

その二は、永積安明氏によって提唱されるもので、岩波古典文学大系31『保元物語・平治物語』解説（昭和三六年七月）、「保元・平治物語の成

立」（『中世文学の成立』所収、昭和三八年六月）、「『平治物語絵詞』について」（『軍記物とその周辺』佐々木八郎博士古稀記念論文集所収、昭和四四年三月）で発表されている。それによると、現存『平治物語』諸本を分類して、十一類の系統に整理し、そのうちもつとも古体を保つ第一類本として陽明文庫・学習院（九条家旧蔵）⁽¹⁾本をあげ、絵詞を第二類本として『平治物語』諸本中に位置づけておられる説で、この永積氏説は、安部元雄氏らによってうけつがれ、目下、有力視されているようである。

さて、絵詞が『平治物語』諸本の中で占める位置について積極的に論考されたのは、先の永積氏であるが、同氏は、絵詞が数ある本の中で陽明文庫蔵（一）本・学習院本に最も近いことを考証され、また安部氏をはじめ、国文学者の間でも、この点については異論がないようである。しかし、絵巻と永積氏のいわれる第一類本との相関関係についての見解は、それぞれ異っており、国文学の側からの結論はまだ一致していない。さらに、それらは、専ら詞書を対象として、絵についての配慮が十分でないように窺われるところもある。しかし、絵巻として、この作品が存在する以上、これがないがしろにすることはできないので、国文学の分野

での研究を土台にして、私見を加えてみたいと思うのである。

一

まず、順序として永積氏の学説を紹介することから始めよう。

同氏は『保元物語・平治物語』解説および「保元・平治物語の成立」では専ら、諸本の系統分類に重きをおき、絵巻との関係については『平治物語絵詞』についてで詳細に論及しておられる。そこで、ここでは、後者の論証を紹介、引用することにする。

まず、絵巻の詞書、すなわち絵詞と『平治物語』の本文を比較するに際し、同氏は『平治物語』の本文系統は、九条家旧蔵本系統の第一類本を源流としながら、これと対蹠的な本文であると認められる金刀比羅本系統の第四類本および流布本系統の第十一類本の三系列に、集約・代表されている」という理由から、三条殿夜討巻(ボストン美術館蔵)、信西巻(静嘉堂蔵)、六波羅行幸巻(東京国立博物館蔵)の詞書と、陽明文庫蔵(一)本、金刀比羅宮蔵本、流布本として書陵部蔵古活字本をそれぞれ比較検討しておられるが、その論述は、絵詞と氏のいわれる第一類本の近似性を実証するにきわめて重要と考えられるので、やや永くなるが、その概要を次に述べることにする⁽⁴⁾。

三条殿夜討巻において、「三条夜討事件の発端は、諸本すべて「九日」の日付になっており、『百鍊抄』や『愚管抄』等も「平治元年十二月九日」の事件と明記しているが、流布本(以下「流本」とする)・金刀比羅本(以下「金本」)は「九日の子の刻」とし、陽明文庫本(以下「陽本」とし)と絵詞本(以下「絵本」とし、いずれも九日の「丑刻(うしのこく)」と記しており、この時刻の記載において、上記の本文群は、すでに二つの群に分かたれている。」

三条殿に押し寄せ、「上皇と問答したけっか、信頼がむりやりに上皇を車にのせるところを、流本・金本は、「源中納言師仲卿」が車を寄せて催促したとしているが、陽本・絵本は、「兵ども」が車を寄せたと記し、ここにも本文上、流・金本と陽・絵本との二群への分岐が見られる。」

信西宿所の夜討については、「陽本と絵本には、同夜の「とらのこく(寅刻)」に信西の邸に放火したとあるが、流・金本は、ともに「丑の刻」としている。また陽・絵本には、「此(この)三四年は」天下が静かであったと記すところを、流本は「此の二三年は」と記し、金本には、この年数を記していない⁽⁶⁾。これらも、陽・絵本が特に本文的に近い関係にあることを示す一例である。」

なお、永積氏はあげておられないが、上皇が大内へ御幸になったときいて、大殿、関白、公卿殿上人らが急ぎ参内し、馬車の馳せちがう音のすざまじかったことを叙述するのは陽本と絵本で、流・金本はこれについては記していない。信西巻では、「流・金本の、信西出家の由来を語って、ある時信西が自分の画像に、「寸の首、剣の前にかゝって、むなしくなる」(流本による。以下同じ)という相を見たことが出家のきっかけになったとし、さらに信西が、「九日の午刻」に「白虹日を貫くといふ天変」を見たとする条々は、陽本にも絵本にもない。」

次に、逃亡した信西が光保の郎従に発見された情景では、「流本にも金本にも信西は、そこ(田原)で穴を掘って入り、敵に発見されてから殺されることになっているが、絵本は、「山中にて自害して」と明記し、絵巻の画面にも血刀を持って仆れている信西が描かれている。また陽本にも、敵が田原に来た時、「じが、いして被埋たるしがいあり」とあって、明らかに自害していたことになっている。『愚管抄』にも、「腰刀ヲ持テアリケルヲ、ムナ骨ノ上ニツヨク立テ死テアリケルヲ」とあり、『百鍊抄』も、「信西於三志加良木山「自害」と記して、陽・絵本が事実にならなくて書かれているに相違ない。少なくとも、後者の本文群と前者の群には、こういった大事なところでの差別が見られるので

ある。」

首実検の条では「流・金本は「十四日」のこととし、陽・絵本は「十六日」とする。この日付についても、二つの伝本群は対立している。日付の件はつづいて翌日、信西の首を大路を渡したことを記して、それを流・金本が「十五日」とし、陽・絵本は「十七日」とするところにも二群に分かれた、また陽本・絵本では、源判官季経（絵本は「資経」）らがこの首を受けとり、さて大路を渡すことになっているが、流・金本には、源判官による信西の首受取りの条が欠落している。⁽⁷⁾『百鍊抄』には、「十七日、少納言入道信西首、廷尉於三川原請取、渡大路」と明記しており（中略）、陽・絵本の記事は、『百鍊抄』の記録と矛盾しない。」

信西の首をかけた場所として、「流・金本は、何処の獄門にかけたかを記さない。ところが陽本は、「ひがしのごくもんのまゑなる櫓の木にぞかけてける」とし、絵本には、「西、獄門のあふちの木にかく」とあり、獄門に東・西の相違が見られる。『百鍊抄』が、これを「懸西獄門前樹」としているのによれば、このばあい絵本の「西」が正しいものかと思われる。⁽⁸⁾

六波羅行幸巻においては、永積氏は流・金本と陽・絵本との明らかな群分けは示されず、絵詞にのみみられる叙述について明らかにしておられる。

さて、この絵巻にみられる独自の内容、表現については、永積氏は、この論文の中で全体にわたり詳細にのべておられるので、重ねてそれを紹介しよう。

三条殿夜討巻では、諸本および『百鍊抄』がいずれも、まず信頼、義朝の兩人が三条殿に押し寄せたと記述しているのに、絵詞の冒頭、信頼が上皇に申言するところでは、義朝については記せず、信頼の名だけしかあげておらず、また、乱戦のあさましさを記した直後に「義朝謀反をおこして三条殿に夜打に入て火をさして」とここでは信頼については記していない。この点について永積氏は「絵巻と物語という異質のジャンルにそれぞれ固有な表現に根ざすものとして、早くも巻頭部分から、その本質を示唆し」、「それぞれ絵巻の場面場面に

おける主要人物あるいは主要集団を中心とした描出が実現され、それらの画面画面に照応する詞書の表現が展開されているという当然の結果を示すものにはかならないのではなからうか」とされる。

次に、上皇をむりに車にのせるところで絵詞は「兵ども」が車を寄せたとし、さらに上皇と門院とが同車されたあと「師仲卿ぞ御車をばよせける」と付け加えている。師仲が車を寄せたとするのは、流本・金本と共通するが、永積氏はこの「くりかえすところは、表現として問題があり、この部分の絵詞には、何らかの混乱があるように思われるが、今は問題点の一つとして指摘しておくにとどめたい」と未だ結論はだしておられない。

上皇の大内への御幸に際し、供奉した佐渡式部大夫重成について、陽本・流本では、「この重成はかつて讃岐院御幸の時にも、同様守護の役を勤め、二代の君に仕えた宿縁の者であるという条がみえる。」「この条が金本に欠けているのは、これも主題の集中化を見せている金本が、本筋の主題をそらす余談を切り捨てたものと認められるが、絵本にないのは、おそらく絵巻としても、この部分に書きこむことの不適当な、余談として省略したものと考えられる。ここにも絵本の本文の性格がかいまみられるのではなからうか。」

また、御所方の大江家仲と平康忠とが討たれて、その首が侍賢門にうちたてられたという条は、絵詞以外の三本はいずれものべるところで、絵詞にそれがないのは、「おそらく絵本の詞章の欠落と考えざるをえないのではなからうか。これも絵詞のありかたについて、考慮すべき材料の一つである。」と、絵詞の特殊性を指摘しておられる。

信西巻で、絵詞では、信西の出家の由来に関する部分がなく、信西の京都脱出の大筋は「ほぼ諸本と同じ事実にもとづきなながらも、信西が奈良方面へ逃げるまでの経過は、ほとんど抄略され、すぐ自害したことが記されている。また絵本には、自害後穴に埋められていたのを、出雲前司光保の郎等が掘り出すまでの経過についても全く抄略されている。ところが諸本には、この間にさまざま

まな経緯が詳しく述べられているのであって、絵巻の詞章は、そのプロセスのうちの一部だけを抽出し、それを画面に描いたもののように見える。つまり絵詞の本々は、絵巻であるために、物語本来の叙述を切り捨てたり、要約したりしたところがあり、この部分は、その事実を明らかにしているように思われる。」と、永積氏は、ここでは絵詞は物語本文のダイジェスト的性格をもつとしておられる。

次に、信西の都脱出の日付を「十日ひそかに都を逃出して」と明記しているが、他本ははっきりせず、九日ともうけとられる叙述である。さらに、逃出した所を絵詞は「伊賀国境、北の山中」とするだけで、他の三本は「田原が奥」と地名をあげ、『愚管抄』にも「田原」と見えていて、この方が正しいと思われるが、「絵本はおそらく、山中であることと、自害したことが、画面として必要であり、また、この程度の地名による状況の特色などは、とりわけて記す必要もなかったので、地名を省いたとしても不都合はなかったであろう。」とされている。なお、『百鍊抄』は、「志加良木山」としている。

次に、獄門場面で詞書と異なり、信西の首が門の棟木にかけてある点について、永積氏は「首を獄門の樗の木にかけのが、当時の習慣であったことは、『平治物語』の義朝の鼻首が、「左の獄門の樗の木にぞかけたりける」と、流本には下巻に、陽本には中巻に記されており、当時の諸記録も同様の慣習を証明しているのに『平治絵詞』の画面では、明らかに棟門にかけられている。これには、あるいは絵巻が描かれた時、その詞書に「棟」とあったのを「棟」と読み誤ったためで、詞書に「あふち」と仮名であるのは、絵の描かれた後に清書されたためか、という松岡映丘氏の説もあるが、あとで「あふち」と清書したという解釈には従いがたい。ただ陽本・絵本が「樗の木」・「あふちの木」としているのは、『百鍊抄』その他の記録からしても、事実であろうし、もともと、あふちの木にかけたという意味の本文があつて、あるいは、その「棟」を棟と読みちがえるということは考えうることである。桜井清香氏もこの松岡説を紹介

介して、これに従っている(『戦記絵巻の研究』一四七頁)。もしそうだとすれば、絵巻製作のさいの詞書には、「あふち」ではなく、漢字で「棟」と書かれていたことになるので、現存の絵詞を、ただちに原著のままの本文であるとする考えを保留させる材料になるかもしれない。少くとも、このような考えかたから、『平治物語絵詞』の成立以前に一種の『平治物語』が形成されており、その本文によりながら絵巻が製作されたのであらうとする想定を、支持する側面が出てくるであらう。また、そのような本文として現存するものを想定すれば、第一類本が最もこれに近いということになる。」として、絵詞に先行する原本として第一類本が最も近いと想定しておられる。

六波羅行幸巻では、主上が脱出された門が諸本一定でなく、流本は「北の陣に御車を立て」藻壁門、上東門を経て土御門を通り六波羅へ行幸されたとし、金本は「北の陣」がないだけで、あとは同様、陽本は「北のちん」に御車を立て、上東門を出て土御門を東へなると正確に書き、途中に藻壁門のことがない。絵本は「北の陣」に車を立て、朔平門で兵たちに止められたとあって、このあとの上東門や土御門については記していないとして、「この流・金本の「藻壁門」が絵本にはなくて、新たに「朔平門」の名が出てくるのが疑問点である」とされている。なお、警固の兵に止められる場所は、流・金本は藻壁門とし、陽本は別に記さぬが「主上御くるま遣出すに、兵どもあやしみたてまつる。」としている。

さて、永積氏は、鈴木敬三氏『初期絵巻物の風俗史的研究』の論説「北の陣即ち朔平門であるに係らず、北の陣に車を立てて乗せ奉り、朔平門を固めた武士ども停め申せば、とあるのが矛盾の発端である。而して此の矛盾を補うために藻壁門に改めたことと見られ、更に方向が逆になったことの言釈として、『参考平治物語』所引の異本^{京師本}半井本には、惟方をして、『上藤女房達ノ北野詣ノタメ出デサセ給フナリ』と言わしめて居るが、上東門に至っては改め得ず其のままになったのであらう。この点から見ても、本絵詞は、平治物語成立の原

始の倂が窺われる。」という説をふまえて、さらに、「陽本の本文には、「藻壁門」の名も、「朔平門」の名もない。ただ北の陣に車を立て、そこから女装の天皇を載せて出発するが、「主上の御くるま遣出すに、兵どもあやしみたてまつる」とある。さて、別当惟方の智恵で、兵どもをだまして危機を突破したあと、「上東門を出させ給て、土御門を東へなる」としており、以上の通路は、すべて自然で、少しの矛盾もない。」とし、物語の本文としては、陽本のように、門名としては「上東門」だけを記したものが原本に近く、したがって、「陽本の本文は、絵詞の本文より、さらに遡りうることになる。」と、ここでも、陽本が絵詞に先行するものとされている。

次に、主上脱出に際し持出した神器、宝物については、『愚管抄』によれば、神璽と神剣とは、車に入れ、天皇とともに渡御とあるが、この点については諸本に記されていない。ただ絵本だけに、「神璽宝剣も御車にいれられにけり」としていることに注目したい。」とし、「また、ほかの宝物のことは陽本と絵本の本文が、最も近接している。」とされている。

そこで、陽本の本文を引用して検討してみよう。

主上も北のちんに御くるまを立て、女ぼうのかざりをめして、かさなれる御衣をたてまつる。玄象、鈴鹿、大床子印鑑、時の札、みなくわたしたてまつれと御さたありしかども、さのみはかなはず、ないし所御からびつも大床までかき出しまいらせけるを、かまたひやうゑがらうとう、見つけまいらせとめたてまつる。

『愚管抄』では、神璽、宝剣を車に乗せて天皇と共にくり出したあと、尹明ハシヅカニ長櫃ヲマウケテ、玄象、スゞカ、御笛ノハコ、ダイトケイノカラビツ、日ノ御座の御太刀、殿上ノ御椅子ナドサタシ、入テ、追ザマニ六波羅ヘマイレリケレバ、と記している。

絵詞では、

神璽宝剣も御車にいれられにけり、玄上、鈴鹿ハ成頼これを取り出て、わたされぬ。内侍所をハかきいだしたてまつ覧としけるを正清が良等ミつけてをひとめたてまつる。

となっている。

陽本では、玄象、鈴鹿以下の宝物が、天皇脱出の際にはもってゆかれなかったことをのべているわけであるが、これらがその後、わたされたかどうか明らかにしていない。絵詞は、「成頼これを取り出てわたされぬ」とするが、『愚管抄』の記事にあるように、後から一括して送りどけたのかどうか、この文章だけでははっきりしない。ところが、絵には御車の中に琵琶が描かれているから、天皇が脱出される時にもち出されたこととして、描いたものと考えられる。

しかし、永積氏は「絵巻は絵詞の本文のあいまいなところから、琵琶を描いてしまったものらしく、本来は陽本の本文のようにあるべきであろう。」とされる。

美福門院の六波羅御幸については、絵巻以外の三本にこの記事がなく、しかも、『愚管抄』には時刻は示さないが、この御幸のことが記されている点をあげて、「絵詞だけが『愚管抄』の記事に近いのは、絵巻として門院の車の行列を描出し、それを媒介にして、次の場面に移る効果を考慮したため、この一条の本文も省略しなかったのであろうか。とにかく、諸本には見えないが、事実としてあったと認められることの叙述が、絵詞にだけあるばあいもある、ということだけを、ここに付記しておきたい。」と比較的この問題は軽く扱かれている。

以上、永積氏は絵詞と『平治物語』の代表的な諸本の本文を比較検討したのち、絵詞の性格について、次のように結論する。

一、絵詞は『平治物語』の本文に対しては、「抄略本」あるいは「要約本」であり、「絵画を中心に考えられた、まさに絵詞であることを認めざるをえない

い。」それは「絵画的な側面の必要性から一定の限定を受けざるをえない本文として成立している。」したがって、『平治物語』の本文としては、第一類本に対して当然、第二的な地位を占めざるをえない。」

二、絵詞は、年月日をはじめとする歴史的事実の記述など、重要部分で陽明文庫本と一致し、またそれらが当時の諸記録と正確に符合する場合が多い。したがって、『絵詞の本文が第一類本とならんで『平治物語』の伝本中、最も古態をとどめている有力な本文であることを推定させる。」

三、しかし、『絵詞の本文には、いくつかの矛盾や文脈上の疑問点があり、そのうちには、どうしても現存の絵詞以前の本文、つまり絵詞が原拠とした本文を考えざるをえない部分がある。」

四、以上のことから、『第一類本の本文を最も原流本に近いとする本文評価の体系を、絵詞の本文のささえによって、いっそう確実にするものであるといえる。」

永積氏はさらに、『平治物語』に関して、「この物語がまず絵巻として成立したか、あるいは本文だけの物語がまず成立して、それによって絵巻が作られたか」という問題について言及されている。すなわち、信西の死後、その子孫が鎮魂の意をこめて、信西絵として絵巻を製作したのが『平治物語』の原本であろうとする説（例、日本古典文学大系『保元物語・平治物語』所収「月報51」小林太市郎「平治絵について」）に対する反論として、絵詞は第一類本に比較して、きわめて簡略で、「画面の取材あるいは描き方に照応し、あるいは限定されたところが少なくない。」とし、「三条殿夜討巻」において、並記すべき信頼・義朝の姓名の二ヶ所にわたる一方の欠落は、「抄略された現存の絵詞本から、二ヶ所ともに物語が増補したと考えることは困難」とされ、「信西巻」で、信西の逃げこんだ「田原」の地名がないこと、「六波羅行幸巻」における「朔平門」の矛盾、また「信西巻」で「信西の首を獄門のあふちの木に懸けたとする部分でも、現存絵詞にさき立つ本文が想定される」ことなどをあげて、「信西という

特殊な人物と、その子孫という事情から、『平治物語』の成立に、いわば『原平治物語』あるいは『前平治物語』とでもいうべき「信西絵」「義朝絵」「常盤絵」等を推定することは、たしかに興味深い成立論であるが、合戦絵巻の現実としては、必ずしも、これが一般的なものとはいえないのである。

『平治絵』から『平治物語』へという魅力的な推定を尊重し、『原平治物語』がこのようなプロセスをへて成立したことを、かりに認めたうえでも、現存の『平治物語絵詞』と『平治物語』諸本の本文そのものから解きほぐしてゆくばあい、その『原平治物語』が、現存の『平治物語絵詞』である保証はないように思われる。くりかえし述べたように、現存の『平治絵詞』によって推定するかぎり、それは、いわゆる『平治物語』の成立に先立つものではなく、逆に物語の導きによって、絵巻として成立したという、はなはだ散文化的な成立論に立かえらざるをえなくなるからである。」と推論しておられる。

以上が永積氏の『平治物語絵詞』について」の論旨である。やや長文の引用による紹介であるが、最近の国文学界における『平治物語絵詞』に関する研究は、この永積氏の論文がいわば原点となっている感がつよいので、敢て引用させていただいた次第である。

二

次に、安部元雄氏の説を紹介するに先だち、永積氏もすでに『保元物語・平治物語』の解説で、述べておられる「保元平治の日記」についてふれる必要があろう。

『愚管抄』巻第四によれば、保元元年七月十一日の合戦の記録について、コノ十一日ノイクサハ、五位藏人ニテマサヨリノ中納言、藏人ノ治部大輔トテ候シガ、奉行シテカケリシ日記ヲ思ガケズミ侍シナリとあり、また同巻第三に

保元ノ乱イデキテノチノコトモ、マタ世継ガモノガタリト申モノモ、カキツ

ギタル人ナシ。少々アリトカヤウケタマハレドモ、イマダエミ侍ラズ

と記していて、保元・平治合戦についての同時代の記録の存在したことを暗示するが、さらに、『源平盛衰記』巻第廿二、「入道官符を申す事」に清盛が新院（高倉院）の御所で、源為義、義朝をほろぼしたことにふれて、これについては「保元平治の日記と申す物に見え侍り」と言上している。これは治承四年（一一八〇）のことである。しかし、この清盛の言を直ちに信じてよいかどうか問題になるが、ともかく『源平盛衰記』成立以前に、このような日記が存在したことは信じてよいであろう。またこれは、雅頼の書いた日記とは別の平治の記事をも含めた記録であったことは想像に難くない。永積氏は、この日記を「あるいは現存する保元・平治物語の祖本であったかもしれない。」とされている。

さて、安部元雄氏は「『平治物語絵詞』と第一類本『平治物語』について」（『英城キリスト教大学紀要』三号 昭和四十四年十一月）において、第一類本と絵詞は最も近い関係にあり、しかもともに古本であるとする永積氏の説を継承しながら、さらに、絵詞と第一類本との先、後関係について、永積氏とは異なった意見を出し、また永積氏が問題にされなかった、六波羅合戦巻（摸本）をとりあげて、諸本と比較検討し、その諸本における位置を明らかにしておられる。この摸本は、白描摸本であるが、この巻の残欠の断片とも符合し、また詞書の断簡も摸本詞書と一致しているので、資料的価値からいっても、原本同様に扱うべきと考える。そこで、まず、この問題についての安部氏の説から紹介する。

第一段は詞書を欠くので、第二段詞書からのべられておられるが、この段は、「第一類本のものとも、また流布本、金刀本のものとも言えない」とされながら、義朝が西の河原へ引きしりぞくという条は陽本の文章の発想法に類似するものとして、別の発想法からなる流布本、金刀本と区別しておられる。

第三段詞では、ここに記されている「守殿ハ思食旨ありてひかせ給也、正清ハ御供つかまつる。殿原はしばしふせぎ箭いてのばしまいらせよ」という鎌田

正清の下知が、流布本、金刀本でも文章は異なるがみられるのに対し、第一類本にはみられない、と指摘される。

第四段詞は「信頼卿の宿所三ヶ所、并義朝か六条堀河の家をやきはらふあひだ餘盡数十町にをよぶ、感（感）陽宮の煙のごとし」とあり、この焼討は、流布本、金刀本にはみえるが、陽本は兩名の宿所焼討を記述していないことから、流布本・金刀本に近似しているとする。さらに、陽本のこの個所

此等が身命をおしまず闘けるにぞ、義朝遙に延にける。其中にも山内首藤刑部は、嫡子滝口がうたれたる所なれば、無跡までもなつかしうおぼゆ。かの咸陽宮の煙、雲とのぼりしを伝聞ては、外国のむかしなれ共、理をしる輩は歎くぞかし。いかに況哉、此平安城の灰燼となるを見ては、心あらむ人誰か国の衰微をかなしまざらん。義朝は相隨ふ兵共は方々へおち行ければ小勢になりて、叡山西坂本を過て、大原の方へぞ落行ける。八瀬と云所を過んとする所に、西塔法師百四五十人、道をきりふさぎ、逆門木引て待かけたり

を引用して、陽本にみる「咸陽宮の煙」の句の条の叙述が何のために挿入されたのか、文脈が通らない点をあげ、またこの句が他の二本にはないところからこれは、「第一類本の作者が『絵詞』を見ながら、この部分を作成したために起った現象であると考えたい。」とし、「作者は『絵詞』を見ながら文章を作成したため、ついにこの焼打が信頼・義朝の宿所を焼いていると言うことを書き加えることを忘れ、帝都が焼かれることのいたましさに対する評言をつけ加えることのみを急いだのであろう。」とまでいわれ、これらの点から「やはり、ここでは『絵詞』から第一類本への流れとして考えなければならぬ現象であろう。」と、絵詞先出説を積極的にとっておられる。そして、第三、四段詞書の流布本、金刀本との近似はこの両本が絵詞を土台にして文章が改作されたためであって、絵詞が流布本によって作られたのではないとされている。

さらに、安部氏は永積氏の説を詳細にわたって批判を加えながら、絵詞先出説を展開されている。その一つは、信西巻の獄門首の光景とそれに対応する陽

本の文章についての関係で、信西の獄門首を見に来る人々の中で「こきすみぞめの衣きて、いんとんとしひさしげなるそうあり。此くびをみてなみだをながして申けるは……」の述懐のところの文章は、信西に対する同情心があふれていて、それは絵詞にもうかがわれるが、詞書には、この隠遁僧は記されていない。そこで安部氏は、永積氏説とは逆に、この図は、第一類本によって構図されたものではなく、「むしろ、この構図が、他の絵の場面よりもはるかに多数の僧形の人物（6名）を描いているため、第一類本の作者が、このうちの一人の心中に、自己の思想を託して、信西賛美の文章をつづることを思いついたと考える方が自然ではないだろうか。つまり、信西の死に対する悲しみをこめてつづられていた『絵詞』の詞書を増補して、信西賛美の文章を綴ったのが第一類の本文であると考えたい」とここでも、積極的に絵詞先出説をたてられる。

安部氏は、陽本のみみる隠遁僧を画面の六人の僧の一人にあてておられるが、画面の僧形のうち、一人はこの「いんとんとしひさしげなるそう」に相当するのではないかと、私考する。その僧は、獄門の前やや右よりから首をみあげる老僧で、うすずみの重衣に黒五条の袈裟をかけ、杖極杖をついて、それをささえに背をまるくして、みあげる態に描かれ、しかも、眉を長くのばせた老相であらわされている。「こきすみぞめの衣きて」と陽本にある隠遁の老僧の姿を、私はこの僧にみいだすのである。したがって、先、後問題は別にして、この段では絵巻と第一類本がきわめて近い関係にあることはたしかと考えられよう。

また、安部氏は、六波羅行幸巻における成頼が琵琶をわたしたというところは、第一類本にはみられないから、「この部分もまた、第一類本以外の本文によって構成されている」として、第一類本から絵詞が生じたという永積氏の説に異議を提案しておられる。

さらに、絵詞だけにみられる美福門院の六波羅御幸についても永積氏が「付

記」的に言及されているのに対し、「これは、氏の論理を根底からくずす現象だけに、「付記」ぐらいではすまない」とし、主上が六波羅に行幸なったことを知って、はせ参じた人々を、絵詞は「大殿関白殿太政大臣左右大臣已下の公卿、中宮亮信能、頭中将實国已下の殿上人各被馳参」としているが、他本はいずれも、信能、實国の名をあげておらず、「あきらかに、第一類本以外の資料を使用していることはこれで明白」とされ、また、六波羅合戦巻で、叛謀の徒の宿所焼打ちの詞が、「信頼卿の宿所三ヶ所、并義朝が六条堀河の家」とはっきり宿所の所在を明記していることに注目して、このことは他本にはみられず、「ここでも『絵詞』の詞書が第一類本よりも、正確でしかも詳細な資料にもとづいて書かれていることが知られるのである。」とされている。

また安部氏は、絵詞と流布本、金刀本を比較検討されたうえ、「現存する『絵詞』の詞書は、流布本と金刀本の本文に大きく影響をあたえており、『絵詞』が、流布本、金刀本に対して、確実に先出していることを証明し得ると考えられる」と結論されている。

以上のような検討の結果、安部氏は、永積氏の要点である、『平治物語絵詞』の成立以前に一種の『平治物語』が形成されており、その本文によりながら絵巻が作製されたであろうとする想定を、支持する側面が出てくるであろう。また、そのような本文として現存するものを想定すれば、第一類本が最もこれに近いことになる。」とされる点について、これを一応認めながら、さらに限定をつけ加えて「その「一種の『平治物語』」は、第一類本より、はるかに詳細な歴史資料にもとづいて作製されているらしい。むしろ『平治の日記』でもよばれうるようなものであろう。」（『現存の第一類本は『絵詞』より後出である。むしろ『絵詞』を参考にしながら、文章を作成したと考えられる。』）（『それ故に、永積氏説を、第一類本が『絵詞』より先出したと説いていると読みあやまってはならない。』）（『流布本、金刀本は、第一類本の影響のみならず『絵詞』の詞書の影響をも直接うけており、流布本、金刀本に力点

〔三条殿夜討巻〕 三条殿夜討の日時 首謀者 上皇に車を寄せた者 同乗者 随行者 打死、首 公卿の参集 信西邸焼討日時 平穩の期間 〔信西巻〕 信西のかくれた所 四家臣の出家・法名 信西死様 首実験の日時 首渡し、受取人とその場所、日時 信西の首のありさま 梟首の所 黒衣の老僧 〔六波羅行幸巻〕 主上脱出同乗者 脱出経路	絵詞（画面）	陽明文庫本	流布（金刀）本	愚管抄	百鍊抄
九日丑刻 信頼・義朝別記 兵ども、師仲 上西門院 信頼・義朝・重成・光基・季実 （一名の首をかき切り、二名の首を雉刀につけ御所に向い、信西巻で門脇にたてる） 大殿・関白・公卿殿上人車馬騒然 同寅刻 この三四年	同日日夜、うしのこく ゑもんのかみのぶよりさまのかみよしとも つはものども 上西門院 のぶより、よしとも、みつやす、みつもと、しげなり、すゑざね 大江家仲・平康忠二人の首を、ほこにつらぬき待賢門にささげる 大殿・関白・大政大臣・大宮左大臣以下公卿殿上人、車馬騒然 同夜のとのらこく 此三四年 たはらがおく 西景、西実、西親、西清 西光（後に出家） 穴の中を板で囲みうめられたのち自害 十六日（十四日信西発見報告） 源判官季経以下の検非違使、おおいみかどがわら同十七日 ひがしのごくもんのまえなる樗の木 こきすみぞめの衣きていんとんとしひさしげなるそう 中宮・紀二位 北のちん―上東門―土御門	同日の夜子刻（九日の子の刻） 信頼・義朝 伏見（の）源中納言師仲上西門院（記せず） 信頼・義朝・光泰・光基・季実・重成（重成だけ記す） 家仲・泰忠両人の首待賢門に打立 大政大臣・左右大臣・内大臣以下公卿殿上人僉議 同丑刻（其日の丑尅） 保元の乱已後（保元以後） 田原が奥（伊賀と山城の境田原が奥） 西光、西景、西清、西実 穴の中から竹を出しうづめられる。発見時生存、首を切る 十四日 明る日（十五日） 信頼、義朝の車の前で首がうなづく 獄門 中宮（中宮・紀二位） 北の陣―藻壁門―上東門―土御門	九日夜 師仲源中納言 上西門院・紀二位 重成・光基・季実 大和国ノ田原 西光、西景、西実、西印 穴の中にほりうづめられみつかりそうになつて胸を突いて自害 志加良木山 自害 延尉 川原、十七日 西獄門前樹	九日夜 右衛督信頼 前下野守義朝 上西門院	

をにおいて考察された美術史家の成立論が『絵詞』↓『平治物語』の発生コースを想定したこと、成立論上、ある一面の真理を捉えていたことをみおとしてはならないこと。」この「四つの限定をつけ加えるなら、永積氏は、その正当性をまずはずであると考えている。」と結ばれる。

すなわち、絵詞に関していえば安部氏は、『平治の日記』ともよぶべきものが最初に先行し、次に、絵詞、第一類本の順に成立し、流布本、金刀本も絵詞による本文改作が行なわれているとみられているもののである。

このほか、笠柴治氏によつて、永積・安部両氏とは全く異なった見解が示されている。永積・安部両氏の説は、ともに第一類本を『平治物語』諸本中、

持出した宝物 渡した者と宝物	神璽・宝劔 成頼、玄上・鈴鹿			
止められた宝物	内侍所唐櫃	玄象、鈴鹿、大床子印鑑 時の札、なしい所御から びつ		
六波羅御幸	美福門院			
六波羅に参集した人	大殿、関白殿、太政大臣 左右大臣、内大臣、中宮 亮信能、頭中将実国	大殿、くわんぱく殿、太 政大臣、左大臣	大殿、関白殿、太政大臣 左大臣、内大臣（左右大 臣とあり）	大殿、関白殿、内府
〔六波羅合戦巻〕 西の河原へ退いた者	義朝	左馬頭	義平	
正清下知	あり	なし	あり	
三条河原の戦	あり	なし	あり	
謀反人の邸焼打	信頼宿所三ヶ所 義朝六条堀河家感陽宮の 煙のごとし	平安城の灰燼を感陽宮の 煙にたとふ	信頼・義朝の宿所謀叛輩 の家々	六条河原合戦

氏は絵巻の位置について言及され、「三条殿夜討の巻も、これら第一・十一類本と同族的なものと認むべきであろう。」として、絵巻と第一類本との近似性は認めておられるが、絵巻の『平治物語』諸本中における位置ということになる、永積・安部両氏とは対立する意見となる。

三

以上、永きにわたって、国

最も古体をつたえる系統本として位置づけることに立脚した論説であるが、笠氏は「平治物語における平治物語絵巻の位置―「三条殿夜討」の場合―」（『軍記と語り物』七号、昭和四十五年四月）で、絵巻の三条殿夜討巻と信西巻に関連する『平治物語』諸本の詞章を整理し、記事内容を項目化して対照させ、永積氏のいわれる第一類本と第四類本（金刀比羅本）の対立の間に他の諸本は存在するとし、さらに第一類本のもつ諸矛盾を指摘批判したのち、三条殿夜討巻の詞書と諸本とを対照させて、「第四・三・五・九類各本と、第十・十一・一類各本の二群が存すると言えよう。」「そして更に第十一・一類本に見出される対前者群の異文は、概ね所謂増補補入的要素を多分に有するものである。」「つまり、後者群は、前者群の変化したものと位置づける事が出来るように思われる。」として、第十一類本（流布本）と第一類本が同族であり、それは第四類本（金刀本）の変化したものとするわけで、これは高橋貞一氏の説に近い見解であり、したがって永積・安部両氏とは全く対立するご意見である。このような立場から笠

文学の研究成果を紹介した。特に、永積・安部両氏のお説を多く引用したが、これは、諸本との異同について試みようとした私の計画が、すでに両氏によって具体的に、殆んど指摘されつくしていることを知ったためであり、また平治物語絵巻の性格を考えるうえに、きわめて示唆に豊んだご意見がのべられているからである。

そこで、両氏のご指摘になった異同個所に、私見と『愚管抄』『百鍊抄』の記事を加えて、絵巻と諸本の異同について表をつくり、この問題について、私なりに考えをまとめてみたい。なお、ここで用いる資料の典拠は、「絵巻」は原本、「陽明文庫本」は未刊国文資料本、「流布本」と「金刀比羅宮本」は岩波版古典文学大系本、『愚管抄』も同上本、『百鍊抄』は新訂増補国史大系本を用いた。

この表を一覧すれば、永積氏のご指摘通り、絵詞と陽明文庫本（永積

氏説第一類本)が最も近似していて、しかも、史実に忠実な記述であることが理解されよう。

次に、絵巻と第一類本との関係はどうか、永積氏は、すでに紹介したように、『平治物語絵詞』の成立以前に一種の『平治物語』が形成されており、その本文によりながら絵巻が作成されたのであろう……。そのような本文として現存するものを想定すれば、第一類本が、最も近いということになる。」とされ、六波羅行幸巻における「朔平門」の矛盾を指摘して、第一類本が「上東門」だけを記しているのが原本に近く、また絵詞にみる「いくつかの矛盾や文脉上の疑問点」のなかには「どうしても現存絵詞以前の本文、つまり絵詞が原拠とした本文を考えざるをえない部分がある」とされている。すなわち、第一類本に近似した「平治物語」を想定して、それによって絵巻が作製されたとするわけである。

これに対し、安部氏は、六波羅合戦における謀叛人の宿所焼打にさいして用いられた咸陽宮の煙の譬喩を『絵詞』から第一類本への流れとして考えなければならぬ」とし、六波羅行幸巻における美福門院の六波羅御幸や、六波羅に参集した殿上人の信能、実国の名が、絵巻にしかみられない点、さらに六波羅合戦巻の信頼、義朝の宿所の具体的記述などをあげて、『絵詞』の詞書が第一類本よりも、正確でしかも詳細な資料にもとづいて書かれている」とされる。さらに、信西自害の条で、第一類本と絵巻画面の違いから、『第一類本に非常に近い一種の『平治物語』を『絵詞』の製作者がもちいていたとするなら、板囲いを描いているはずであるし、四人の従者をも描いていたはずである」として、永積氏説に異論を説えられている。安部氏の説を要約すれば、絵詞のもとに

なったものは、第一類本に近似したものではなく、また、第一類本は絵詞より後出で、絵詞を参考にしながら文章を作成したということになる。

ここで注目すべきは、両氏とも絵巻を作製するにあたって、その典拠となる祖本を想定しておられることである。その点については、私も大体、同意見である。しかし、永積氏は、その本が第一類本に近似するものとし、安部氏は第一類本より正確、詳細なものとされるところに、両氏の意見は対立する。

永積氏のいわれるように、『平治物語』諸本中、第一類本と絵詞が非常に近似していることは、明らかである。しかし、絵詞と第一類本には若干の相違があり、しかも、絵詞の方が史実に則している点が多い。そのことを安部氏はいわれるわけであるが、絵巻の典拠になった本についても、第一類本との相違が当然存在したことも明らかであって、その相違は、史料性において、第一類本より正確、詳細である点である。

そこで、考えられることは、第一類本にも、先行する祖本が想定できるわけで、その本が絵巻と第一類本との近似関係から、絵巻の典拠本であったと考えることは可能である。すなわち、第一類本と絵巻には、それぞれ先行祖本があり、それが同一本で、第一類本と絵巻は、いわば兄弟関係で、その祖本から生まれたと考えるわけである。勿論、絵詞だけをとりあげた場合、当然、祖本を要約したものになるが、いかにして、祖本を要約し取捨選択するかについては、絵巻製作者の考え次第ということになる。三条殿夜討巻において、家仲、康忠のことが詞書になく、絵に図示されていることは、はじめから、このようにするべく計画

されていたことである。

次に、第一類本と絵詞の間で微妙な相違が気づかれる。それは三条殿夜討巻で、公卿たちの騒ぎをのべる条である。すなわち、第一段詞書の末尾で

義朝謀反をおこして三条殿に夜打に入て、火をさして、「院も煙中をいできせ給はず、」といふものもあり、「大内へ御幸なりぬ」とも、ものしりければ、大殿、関白殿よりはじめ奉て、公卿、殿上人をのく群参せらる。馬車の馳ちかふをと、雷のごとし、天にひびき、地にひびく事おびただし

とある条で、陽明文庫本では、信西邸を焼打して一段落ついたのち、信西の子息五人闕官される条の文中、五人の子息の名前を書き並べたあとに、

又京中にきこえけるは、ゑもんのかみ、さまのかみを語て、ゐん御所三どう殿をようちにして、ひをかけらるあいだ、ゐんないもけぶりのなかを出させ給はずとも申、又大内へ御かうぎやうなかはなりぬともきこえり。さるほどに大殿くわんぱく殿大内へはせまいらせ給。大殿とは法性寺殿。くわんぱく殿とは中殿御事なり。太政大臣師方、大宮の左大臣伊通以下、くぎやうてんじやう人、ほくめんのともがらにいたるまで、われさきにとはせまいる。むまくるまのはせちがうをと、てんをひぐかし、地をうごかす。人あはてたるさまなり。

となっている。

この両本を比較すると、絵詞では、この前で、院の大内御幸についてはすでにふれているわけであって、この条は公卿たちの狼狽ぶりを示そうとしたものと考えられるが、詞書の記述では、大殿、関白殿らが、どこに参集したのか、もうひとつはつきりしない。ところが、陽本では、

はつきりと、大内へ参集したと記し、さらに、大殿、関白殿が誰れなのか説明文を挿入し、他の公卿も人名を記入している。これは、あきらかに、絵詞の方が古体を伝えているといえよう。恐らく、祖本においては、公卿の狼狽ぶりの記述も、あいまいな表現がとられていたのではないかと考えられる。そして、絵詞はそれを踏襲したのではなからうか。さらに、画面のはじめに公卿の牛車が三条殿に馳せ向つて混雑する有様が描かれているのは、これを裏書きするといえよう。もし、陽本の記述から絵詞が派生したなら、このようなことにはならなかったと思われる。

また、一方においてこの条の陽本は、先にもふれたように、文章の構成が一貫していない。信西子息闕官されるの記事中に、何のために入りこんでいるのか、理解にくるしむところである。したがって、その祖本もかなり錯雑としていたことが想像されよう。しかも、「車馬の馳せちがふをと、てんをひぐかし、地をうごかす」の記述は、絵詞と非常に近似していて、両者の典拠がきわめて近いことを示唆するといえよう。

次に、信西巻において、詞書第二段では、信西の出自、都脱出、自害、そして出雲前司光保の郎等に発見される経緯をきわめて簡単にその要点だけを記述している。ところが、陽本では、信西の出自、少納言入道と呼ばれた理由、子供たちのことを記したあと、突然に

同十四日いづものかみみつやす、内裏にまいりて、せうなごんにうだうがゆくゑをたづねいだしてこそ候へと申ければ、やがてくびをきれとおほせられ、承てまかりかへりにけり

と、信西発見についての光保の報告をのせ、つづいて、「さるほどに去

九日の夜のくわんしやうおこなはれける……」と勸賞（流布本、金刀本は除目）の記事があり、さらに「同十六日卯刻、おおみかどよりにかかに火いできたり……」と火災記事がつづいたのち、

同日いづものかみみつやす、又だいらへまいりて、今日せうなごんにうだうがくびをきりて、神楽岡のしゆくしよにもちきたりて候と申しかば、のぶより惟方同車して、神楽岡に渡てじつけんす

と、つづく、そして、この首実検の記事のあとに、信西の都落ちと、四人の侍者に別れて、十一日に穴に埋められ、十四日に光保郎等に発見される条があつて、

じがいして被埋たるしがあり。そのくびをきりて奉りけるなり

となつてゐる。流布本や金刀本はこのような錯綜はなく、ほぼ日時の順に事件を記述して整理されているのに比較すると、かなり未整理で古体をもつと思われる。この条にみられる十四日の光保の信西発見報告とそれに対し首を切るように指令したことは、日付は一致するが、発見の経緯をのべた文章では、指令をあうぐまでもなく、発見して直ちに首をきつたことになつていて、その間に矛盾がみられる。この点は、三条殿夜討巻の第一段詞書中に、上皇に車をよせた者を「兵ども」としながら、また「師仲卿ぞ御車をばよせける」と矛盾重複した内容をのべたのと、相い似たところといえよう。そこで、両本の典拠になつた本は、異説も併記してあつたか、あるいは、いろいろな伝承をあまり整理することなく、書き止めたもののなか、いずれにしても、説話が物語として定着する過程の一本と見ることは、ほぼ間違いまいであらう。あるいは「平治の日記」と称するものであるかもしれない。それはともかく、絵巻と陽

本の祖本は、同一本か、さもなくば、きわめて近似するもので、それを典拠にして一つは「絵巻」となり、一つは「物語」になつたと私は考えるものである。

以上、平治物語絵巻の詞書と、『平治物語』諸本を比較検討した結果、絵詞の性格を要約すると、次のようになる。

一、絵詞にはその典拠となる本（日記、記録のようなもの）が想定されること。その本はまた永積氏のいわれる第一類本の典拠となつてゐる可能性が強く、絵詞と第一類本は兄弟に近い関係にあること。

二、絵詞は史実にきわめて忠実であること。

三、したがつて、絵詞は叙事性がよく、感想、評論、故事・由来譚の挿入は極力ひかえ、事件中心の記事であること。

四、そのため、『平治物語』としては抄本性格が強くみられること。このうち、絵詞が抄本性格をもつことについては、すでに永積氏も言及されるところであるが、これについては、絵巻としての特性の面からさらに述べる必要がある。

藤原時代末・鎌倉時代初期の説話絵巻の特質としてあげられることは、絵は詞章のたんなる挿絵ではなく、絵と詞が表裏一体となつて、いわば有機的なつながりで、説話内容を観者に知らせる所にある。信貴山縁起絵巻・粉河寺縁起絵巻・伴大納言絵巻・吉備大臣入唐絵巻などいずれも、詞は説話の大筋を示し絵がそれに肉づけして、詞には述べていない様々な状況、雰囲気や伝え、絵と詞が一体となつて豊富な内容たらしめてゐるのである。そこに日本説話絵巻の特質とその魅力が存するわけである。このような説話絵巻の特性を無視して、詞章だけをとりあげて

議論することは片手落ちといわねばならない。

平治物語絵巻を、上記の諸絵巻と比較すると、絵のもつ説話能力は十分とはいえない。しかし、三条殿夜討巻の巻頭にみる雑踏光景は詞ではいいあらわせない混乱を十二分に表わし、その迫力は比類ないものといえよう。また、黒煙と火焰につつまれる三条殿と御所内の混乱、縁の下をのぞきみる武者などの有様は、陽明文庫本に

三でう殿のありさま、申もをろかなり。門々をばつはものどもうちかこみ、所々よりひをかけられければ、もうくわ塵空に満、暴風けぶりをあぐ。公卿てんじやうびと、つぼねの女ばうたち、何も信西が一ぞくにてぞあるらんとて、射伏切殺しけり。ひにやけじといづれば矢にあたり、やにあたらしとすればひに焼けり、やにおそれひをかなしむるは、井の中へこそとび入れ。下なる水におぼれてたすからず、上なるは造重たる殿々、はげしき風にやければ、はいもえくいに埋して、たすくるものもさらになし。^(か)

と情感をこめて述べるところを如実に描くもので、詞にみる簡単な要点記述を補ってあまりある画面を形成している。

さらに、御所方の大江家仲、平康忠の討死と、その首が待賢門にかかげられたことは、詞になく、絵がこれを示している。兩人の死は、当時あまりにも有名であったので、敢て詞には記されなかったのであろうか。(図版Ⅶ参照)

信西巻において、信西の死骸埋葬場面は詞書はあまり多くを語らないが、従者のかなしみの風情に読みとるべき情感がある。また首渡し行列、つづいて獄門首の場面に、詞にはない「いんとんとしひさしげなる」(陽明文庫本)老僧を出現させていることは、たんなる偶然の一致と

みすぐすわけにはいかないであろう。(図版Ⅷ参照)

さらに、六波羅行幸巻の主上御所脱出の御料車に琵琶を描き込んでいる点もゆきとどいた配慮で、詞書の不明瞭さを補い、六波羅第門前の光景(第三段)は、詞書にはなく、むしろこの段の詞書に続いて陽明文庫本がのべる

六はらのもんぜんに馬車の立所もなく、色ふしの下部に至まで、かぶとのをくしめたるともがらあいまじはりて、ついちのきはよりかはらおもてまでひしめきあへり。きよもりはこれを見給て、家門のはんじやう、弓箭のめんぼくなるぞとよろこばれけり。

の光景をそのままに描き出したものとみられる。(図版Ⅸ参照)

また、三条殿から上皇を護送する一団の中や、六波羅合戦巻の東国落ちする義朝のそばに稚児鬘の金丸を配しているのも、詞にはないが、この『平治物語』における主要な脇役に対する画家の配慮と思われる。

このように、各巻の場面には、詞書を補足する光景がさまざまな形であらわされているのである。したがって、このような点もふくめて、絵詞の抄本説は成立するわけであるが、絵巻の製作に対し、典拠となる本の存在は、これによっても証明されたことになるであろう。そして、以上の検討によって、この絵巻が藤原末・鎌倉初期の説話絵巻の特質を継承し、絵がたんに詞章の挿絵で終っていないことも明らかにすることができた。このことは、本絵巻が、説話絵巻として、古態をのこしていることを証するものである。

以上の諸点を総合すると、平治物語絵巻は、『平治物語』諸本中、最も古い一本であり、『平治物語』が文学性豊かな物語として形成される

過程を考えるうえに、いわゆる第一類本とならぶ貴重な資料ということができよう。また、日本説話絵巻の伝統を継承する遺品として、その重要性ははかり知れないというべきである。

なお『平治物語』の諸問題の中に、この物語の成立についての大きな問題があり、これについては、角川源義氏「平治物語の成立」(日本絵巻物全集IX『平治物語絵巻・蒙古襲来絵詞』所収 昭和三十九年十二月)や安部元雄氏「第一類本『平治物語』の成立の母胎」(茨城キリスト教短期大学研究紀要)六号所収 昭和四十一年三月)など注目すべき論文がある。平治物語絵巻を検討する場合、この成立問題の中で絵巻を考える必要があるかと考えられる。しかし、これについては、絵巻の典拠になった一本を想定し、それが第一類本の祖本でもある可能性を推定した以上、これ以上の追求はいたずらに推測を重ねる結果になりはしないかとあやぶまれるので、あえて深入りすることを差控えることにした。

注

- 1 陽明文庫には流布本の写本もあり、第一類本は当然別本である。第一類本としては上中の二巻で、下巻を欠く。学習院本は上巻を欠いて、中・下巻の二巻が第一類本に該当する。したがって、第一類本は合成本ということになる。このほか松平文庫本中・下巻が第一類本に該当することが笠柴治氏(『平治物語第一類本と第四類本の間』「長崎大学教養部紀要 人文科学」一〇所収一九六九年十二月)によって提唱されている。なお、未刊国文資料『平治物語(九条家本)』と研究』に学習院本に加えて、陽明文庫蔵(一)本巻上が翻刻されている。
- 2 岩波版日本古典文学大系31『保元物語平治物語』の本文は金刀比羅宮蔵本が底本になっている。
- 3 注2の大系本に書陵部蔵古活字本が付録として翻刻されている。

- 4 『軍記物とその周辺』佐々木八郎博士「一一九頁—一三八頁」。
- 5 宮注 両書とも「夜」とするが、時刻は明記していない。
- 6 宮注 金本は「保元以後」とする。
- 7 宮注 流・金本は、信頼・義朝の車の前で首がうなづいたことをのべているが、陽・絵本にはこの話はのっていない。
- 8 宮注 画面では首は獄門の棟木にかけられており、問題があるが、この点は後でふれる。
- 9 同著書二九四頁
- 10 六波羅合戦巻の詞書断簡は、田村悦子氏によって紹介された。同氏「平治絵巻六波羅合戦巻詞書の断簡について―併せて現存三巻の書蹟に及ぶ」(『美術研究』二五二号、昭和四十二年五月)参照。
- 11 宮注 小林太市郎氏「平治絵」について(『古典文学大系月報51』、昭和三十六年七月)の説をいう。